

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュース・レターNo.58（2018年12月号）◆

月日の経つものは早いもので、2018年にお届けする最後のお便りとなりました、会員の皆さま、どうぞよい年末年始をお迎えください。今年の20世紀メディア研究所は、定例研究会に加え、12月15日に「日中戦争のジャーナリズムとプロパガンダ」の国際シンポジウムを予定しております。（詳細を添付ファイルでお送りしましたので、どうぞご覧下さい。また、ご関心の方にもお知らせ下さい。）参加費は無料で、事前予約等は不要です。どうぞみなさま、お運び下さいますようお願い申し上げます。

ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】

会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いていますでしょうか。会員向けブログでのエッセイは、すでに第27回を重ねており、いろいろな方の研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なさりたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

【第123研究会】(11月17日(土)午後2時30分～5時30分)

・嵯峨景子(明治学院大学非常勤講師)

「『少女倶楽部』『少女の友』『少女画報』にみる戦時下の少女雑誌の動向」
戦時下における代表的な少女雑誌の編集方針、表象と言説について比較検討が行われた。従来「リベラル」と称された一部少女雑誌編集者の方針について、いくつかの反証が提示されたが、そもそも「リベラリズム」概念の歴史性をどのようにあつかうかについて、フロアと議論がかわされた。

・森岡卓司(山形大学人文社会科学部准教授)

「占領期山形の文化運動と『月刊郷土』」

占領期の山形にて発行されていた雑誌『月刊郷土』を事例に、都市の関心から逆照射される地方の在り方や、そうした問題系の中で浮上する「地方の自己表象」が、戦前の生活綴り方運動の中で形成されたアイデンティティとどのように接続／断絶を見るのが焦点化された。そのキーパーソンとして、須藤克三の活動と人脈についての考察も成された。占領期に活況を見た地方文化と、その後の国民文学論との関連を視野に入れた発表であった。

・小山騰(元ケンブリッジ大学図書館日本部長)：「第二次世界大戦直後のベルリン日本大使館“図書館”の行方と英国“敵国戦時出版物要求委員会”(EPCOM)」

ベルリンの日本大使館の図書室に集められていた約二万五千冊の日本語図書が、戦後連合国側に接收され、「敵国戦時出版物要求委員会」(EPCOM)の下で、その一部の五千冊がロンドン大学の東洋アフリカ学院(SOAS)とスラブ東欧学院(SSEES)に寄贈され、ケンブリッジ大学からの問い合わせがあったにもかかわらず調査の機会も与えられず、残りは保管されていたパート・エーンハウゼンのインテリジェンス・ビューロー・ドキュメント・センター(IBDC)が移動するときに処分された、という経緯を EPCOM に関する文書から解き明かして下さいました。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。
<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

●1月以降の20世紀メディア研究会の開催予定は、1月26日(土)、3月30日(土)、4月27日(土)

に予定しております。研究会でのご報告御希望の方は、20 世紀メディア研究所事務局 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【コラム:大学生への雑誌教育の必要性】

毎年、大学の授業で出版論、出版メディア論の講義を担当していて、ここ数年考えることがある。授業で「雑誌に興味がある人」と聞くと、予想以上に多く手が上がる。専門の授業であるので、関心の高い学生が多いのは当然としても、気をよくして購読雑誌があるかと問うと、とたんに手が上がらなくなる。雑誌に興味があっても購読して読んでいるかと言えば、そうでもない。雑誌に対する興味や編集者への憧れは残っているものの、雑誌を積極的に購読している学生は極めて少ない。このようなズレがなぜ生じているのか。漠然ながらではあるが、そう考えることが多くなった。

授業シラバスでは、総合雑誌、週刊誌、写真週刊誌、フリーマガジンなどをも取り上げることにしているが、彼らのライフヒストリーの中で、同時代的にこれら雑誌との出会いがほとんどない。若い世代だから当然だと言われればそれまでなのであるが、今の大学2年生を基準にアンケートを取ってみると、彼らが生まれたのはミレニアム直前の 1999 年。漫画雑誌は『少年ジャンプ』が、男女とも小中高で読まれており、小学生時代に男子は『コロコロコミック』、女子は『ちゃお』『なかよし』がよく読まれ、また女子は、ファッション雑誌の入口に『ニコラ』『セブンティーン』などのティーン雑誌があり、大学生になってからはファッション誌『ノンノ』などが定番である。男子は大学生になって、ファッション誌、スポーツ・音楽など趣味誌を挙げるのが一般的だ。

日本出版学会会長・専修大学教授の植村八潮氏が力説するように、小学館の学年誌がそろっていたのは、『小学五年生』『小学六年生』が刊行されていた 2006 年度末までである。つまり現在の大学4年生くらいまでが、すべての学年誌を読めたことになる。この『小学一年生』をはじめとする学年誌が「総合雑誌」であったことに注目しておきたい。これ以降の大学生は、幼少期に総合誌に触れる機会が減っている。そして、今の小学生が手にするのは、学習雑誌というより月刊学習教材であり、スマホ世代のためか、その後の漫画雑誌やファッション誌にも架橋していかない。

雑誌の面白さは、「雑」という文字が意味するように、グラビア、大特集から小特集、漫画や小説、コラム、連載など、多種多様な分野と表現形式が一つのパッケージに収まっているところにある。このような雑誌の代表が「総合誌」である。特集記事にひかれて買ったみたものの、連載小説にはまって買い続けたとかコラムで思わぬ知識を得たといった体験は広く共感できるところだろう。この積み重ねが、おそらく雑誌購読の下地として必要なのである。知りたい情報を得るだけなら今はスマホがあれば十分である。「雑」たる記事の中から思わぬ出会いを味わえるのが、雑誌閲読の醍醐味であり、セレンディピティ(思いがけないものを偶然に見出す能力)である。

「1カ月間に1冊の雑誌も読まない」中高生が6割、小学生は5割といった調査結果(「学校読書調査」2017年10月)もある。雑誌に触れる機会が減り、結果的に雑誌リテラシーが下がるという負のスパイラルが継続している状況で、少子化の中、購読率を上げる方策を考えなくてはならないとして、ようやくNIE(Newspaper in Education「教育に新聞を」)に倣って、MIE(Magazine in Education)の取り組みが、今年から日本出版学会、全国学校図書館協議会、日本雑誌協会などで始まった。まだネット検索してもこの言葉自体、ほとんど出てこない。認知度がまだないため、本格的に活動していくのはこれからであろう。筆者も大学教育の末端で、将来の雑誌読者を育てていくべく、無理にでも若い世代に雑誌と接触させ、この活動を支えていきたいと考えている。[12月5日付 文責:吉田則昭]